

田村病院ニュース



発行日 平成 29 年 11 月 20 日

田村病院ニュース 第 129 号

発行責任者 木下定子

編集責任者 浦田雅弘



今年もカレンダーは1ヶ月分を残すのみとなってきました。“時間の過ぎるのが早い”と感じるときはどういった状況なのでしょう？いくつか説があるようですが、現在最も有力なのはジャーネー（フランス哲学者）の法則だそうです。これは簡単に言うと「生涯のある時期における時間の心理的長さは年齢に反比例する」というもので、更に20歳で人生の半分を終えているように人は感じるそうです。そうすると、1歳の子供の1年である365日は、50歳の人にとって体感的には1週間というところでしょうか。やけに1年が短く感じる今日この頃です……。

連 携 種 携

職場において、あなたの今の仕事の進行具合はどうですか？「すべて終わったよ！」「いえいえ、まだ半分ぐらい！」というように人それぞれだと思います。でもちよつと待ってください。それはあなた自身しか知らないことではないですか？同じ部署内において、報告すべき点は上司や同僚にきちんと報告し、より良いコミュニケーションを築くことがチーム内の連携につながります。では、他部署との連携はどうでしょうか？今月は小島リハビリテーション部長から「チーム医療体制」のお話がありました。

「まずチーム医療とはどういうものなのでしょう？これは“医療に従事する多種多様なスタッフが各々の高い専門性を前提に目的と情報を共有し、業務を分担しつつも互いに連携、補完しあい患者の状況に的確に対応した医療を提供すること”とあります。

チームとは、人が集まれば形成されるわけではなく、その専門職の職責を果たす十分な技量と同時に円滑なメンバーシップ（各自の役割を果たすことで全体に貢献すること）が求められます。これはいいかえると、自分の職能を十分に発揮するには他職種の職能を理解し、任せるところは信頼して任せることが重要です。

サービスのプロセスにおいては顧客の役割は重要で、患者や家族の参加がなければ十分な効果は見込めない。」といった内容のお話でした。

チーム医療を進めていくには、専門性の向上であり、複数の職種の参加であり、またその



協働体制が重要です。そして忘れてはならないのが患者さん中心であることなのです。

病院掲示版

先月、患者さんの家族さんから渋ガキをいただきました。早速OTで患者さんと一緒に干し柿づくりにトライです。家族さんから干し柿づくりのノウハウを教えていただき、立派な干し柿が出来つつあります。お正月の鏡餅の飾りつけにうってつけですね。



「心理教育のお知ろせ」

心理教育で「よいよい生活について」を担当している精神保健福祉士の橋本と旭です。

この回ではまず、患者さんが思い描く「よいよい生活」をお聞きます。みなさんからは「食べ物があればお腹が満たされる」、「家があれば生活が出来る」、「お金があれば買い物出来る」等の思いが挙がっていました。その思いに少しでも近づくことが出来るよう、現在利用できる制度やサービスを紹介しています。例えば、経済面では障害年金や生活保護、医療面では自立支援医療、住居ではグループホーム等を説明しています。

患者さんが思い描く「よいよい生活」は人それぞれです。その方に合った制度やサービスを入院中から主治医、担当Ns、精神保健福祉士等と共に考えていくことが大切です。

次回は心理教育の総括をします。来月号をお楽しみに～！

＝編集後記＝

皆さんもご存知のように私はよく釣りに出かけます。15年～20年前は面白いように釣れましたが、今はエサをやりに行くのが多くなって、「浦田養殖場」状態になっています。魚が少なくなっていると言われているのも原因の一つでしょうが、魚も学習していると思います。日に日に釣り方も変わって、以前の釣り方は通用しなくなってきました。しかし、今更新しい釣り方をしろと言われてもできません。ここはひとつ若い人に勉強してもらって、それを教えてもらう作戦に出ました。それには若い人とコミュニケーションをしっかりととり、そのサポートをしながら連携を図っていきたくと思います。

